

「平和」な世界へ

石垣中学校 一年 田渕 鈴夏

一九四五年三月、国内唯一の地上戦といわれた沖縄戦。同年八月六日、広島。そして九日、長崎に原爆が投下され日本の戦争は終わった。

今、私達の住む日本という国は平和だ。そもそも平和とは、どのような事が平和なのだろうか。食事が毎日とれる、のどが、かわいた時に水が飲める、法律がきちんと定められ、公正公平な裁判ができる、たくさんあるだろう。だがやはり、一番は、「戦争がない」という事なんだと私は思う。

人を傷つけ、大切な人の命をうばい、悲しみの底に奥深く心も体も沈めてしまう戦争とは一体何なのだろう。そして、それは一過性のものではなく、何代も何世代もずっと悲しみは引き継がれてゆくのだ。

私の母は被爆二世だ。小学校二年生まで、この事はずっと周りには隠してきたという。まだまだその頃は、被爆者や被爆二世に偏見が多くあったのだと母は話してくれた。

母はとても明るい。毎日仕事にも行く。しかし年に数回の検査を欠かさない。被爆に対する遺伝というのは、代が進むにつれ、うすれてゆくものではなく、ゼロか百かのどちらかといわれている。だから、姉妹でも、姉である母は毎年検査を余儀なくされるが、妹である叔母にはそれがない。オール・オア・ナッシングなのである。

戦争は、良い結果を何ひとつもたらさない。憎しみや悲しみの負の感情のみが存在し、親から子を奪い、子から親を奪いさる。そして私の母のように、戦後七十年後経った今でも苦しみを抱え続ける人もいる。「戦争の経験がない」のにである。

私が小学一年生の時の平和集会に母は来た。そこで校長先生の話聞いた。それは「飢え」についてだった。そして、全校生徒で、「月桃の花」を歌った。家に帰ると、母は、その話と歌を聴いて、泣けて泣けてしょうがなかったと言った。その翌年の平和集会では、母達数人のお母さんで、平和についての絵本を読んでもくれた。

今、私は中学生になったけれど、小学校での平和集会はどれも心に残っている。仕事を休んで平和集会に来てくれた母の思いも、今は、少しわかるような気がする。

今、私達は平和について考える。

争いを起こさない、起こさせない、皆が幸せを分かち合い、悲しみを共有し、助け合い、思いやりの心を持って他者に接する事が、できる世界になってゆければと私は願う。とても難しい事なのかもしれないが、人は必ずわかり合えると信じたい。悲しい歴史は変える事はできないが、それを「学び」として、二度とくり返さないような世界になって欲しいと私は思う。